

アーカイブズの必要性に関する一考察

土 井 崇 弘

目 次

- 1 はじめに
- 2 なぜアーカイブズが必要なのか
- 3 なぜアーカイブズが必要なのか
 - (1) 梅棹『知的生産の技術』における主張内容の確認
 - (2) アーカイブズ論への示唆——“知的生産の礎”としてのアーカイブズ
- 4 むすびにかえて

1 はじめに

本稿は、アーカイブズの必要性について、考察を加えるものである。だが、そもそも、アーカイブズとは何であり、アーカイブズは何をどのように取り扱うのであろうか。アーカイブズ先進国イタリアにおけるアーカイブズ学の代表的な教科書『アーカイブとは何か』（ベルティーニ，2012）の第一章における，マリア・バルバラ・ベルティーニの整理をまとめると，「アーカイブズとは，組織あるいは機関を運営する実務活動に関する文書を，体系的に集成して蓄積するものである」と要約するこ

とができる。⁽¹⁾

このようなアーカイブズをめぐる議論や研究が、近年、着実に盛り上がりを見せている。だが、その内容に少し目を向けると、「アーカイブズとは何か」「アーカイブズをどのように運用するか」といった議論・研究が数多く見受けられるのに対して、「なぜアーカイブズが必要なのか」という議論・研究がそれほど数多く見受けられないのも事実である。

そこで本稿では、2 および 3 で、「なぜアーカイブズが必要なのか」という問い——すなわち、アーカイブズの必要性——に対して真正面から論じたいうえで、最後に 4 で、本稿の論旨を踏まえた「日本社会における“難問”」を投げ掛けることで、さらなる考察・検討の呼び水としたい。

2 なぜアーカイブズが必要なのか

日本におけるアーカイブズ学の代表的論者の一人である大濱徹也の主張によれば、アーカイブズをめぐる考察を行う際に最も重要なことは、いわゆる用語集が説く無味乾燥なアーカイブズの定義ではなく、「その根にある世界——すなわち、アーカイブズの原理と哲学——とは何か」を問うことである。(大濱 2008, 71頁) では彼は、アーカイブズの原理と哲学に関して、どのような見解を提示しているのであろうか。

大濱曰く、「アーカイブズが負わされた第一の使命は、国家・コミュニティ・企業・学校など、アーカイブズの存立母体となっている諸組織の記録を体系的に残し、組織の円滑かつ適切なる運営と継続性を保障すること」(大濱 2007, 5 頁) である。つまりアーカイブズには、現実政治の場において行政の効率的運用を高めることや、企業の経営管理の場においてそれぞれの課題に向けた政略をふまえた戦略を構築することが求められている。(大濱 2007, 5 頁) ここで注意を払わなければならないのが、「『組織の記録を体系的に残すこと』と『組織の円滑かつ適切

(1) ベルティーニの整理がなぜこのようにまとめることができるのかについては、土井 2014, 61-62頁を参照。

なる運営と継続性を保障すること』との関係を、どのように理解すべきか」という問題である。

この点について大濱は、「『組織の記録』はその組織に関わる他の人々に対する業務の指針となり、それを共有することによって組織は常に新しく活性化していく場となりうる」と指摘して(大濱 2007, 98頁)、「組織にガタがこないで常に活発に運営されていくためには、その組織が自身の記録をきちんと読み取っていただけるだけのノウハウを蓄積し共有して、その記録を誰でも読めるようにしておかなければならない」と主張する。(大濱 2007, 102頁)したがって彼の考えによれば、アーカイブズに残されている記録資料の第一は組織管理に役立つ情報であり(大濱 2007, 59頁)、その選別を行うアーキビストに求められるのは「その組織が営んだものを体系的に残していく」ことなのである。(大濱 2007, 45頁)

それゆえ「アーカイブズとは何か」という問いに対する大濱の解答は、次のようにまとめることができる。すなわち、アーカイブズとは、「知と情報の府として、当該組織のインテリジェンスたる使命を負わされており、より良き明日に向けた政略と戦略を構築していく器」(大濱 2008, 79頁)であり、「開かれた構造を維持・保障していくために組織が営んだ、その諸活動を支えた知的な生産物を体系的に次の世代に伝えることで、組織を効率的・合理的に運営し、組織に活力をもたらすための管理された情報、あるいは資源としての情報を司る機関」(大濱 2007, 17頁)である、と。

以上、1で言及したベルティーニの見解と、2でみてきた大濱の見解に基づけば、「なぜアーカイブズが必要なのか」という問いに対して、次のような解答を与えることができる。すなわち、アーカイブズが必要とされる理由は、ある機関が、「組織運営の発想」に基づく対応を行う——すなわち、「組織運営」に関する「文書」を「体系的に蓄積する」ことによって、円滑かつ適切にその「組織を運営し戦略構築を行う」た

めの基盤を提供する——ためである，と。

3 なぜアーカイブズが必要なのか

3 では，2 で述べたような「組織運営の発想」に基づくアーカイブズ観と異なる発想に基づいて「なぜアーカイブズが必要なのか」という問いに対する適切な解答を提示するために，梅棹忠夫の『知的生産の技術』（梅棹 1969）に着目して論を展開する。まず初めに3（1）で，その著書の主張内容を確認したうえで，次に3（2）で，その著書から得られるアーカイブズ論への示唆——すなわち，「“知的生産の礎”としてのアーカイブズ」というアーカイブズ観——に基づいて，「なぜアーカイブズが必要なのか」という問いに対する解答を提示したい。

（1）梅棹『知的生産の技術』における主張内容の確認⁽²⁾

梅棹によれば，知的生産とは，人間の知的活動が，何か新しい情報⁽³⁾の生産に向けられているような場合のことである。彼曰く，「つまり，かんたんにいえば，知的生産というのは，頭をはたらかせて，なにかあたらしいことがら——情報——を，ひとにわかるかたちで提出することなのだ，くらいにかんがえておけばよいだろう。」（梅棹 1969，10頁）

このように知的生産とは，知的情報の生産であって，既存あるいは新規の様々な情報をもとにして，それに，それぞれの人間の知的情報処理能力を作用させて，そこに新しい情報をつくりだす作業のことである。梅棹の考えによると，こういう生産活動を業務とする人達が，今日では，非常⁽⁴⁾にたくさんになってきている。

（2）梅棹 1969，9-16頁

（3）梅棹の指摘によると，「この場合，情報というのは，なんでもよい。知恵，思想，かんがえ，報道，叙述，そのほか，じゅうぶんひろく解釈しておいてよい。」（梅棹 1969，10頁）

（4）というのも，「研究者はもちろんのこと，報道関係，出版，教育，設計，経営，一般事務の領域にいたるまで，かんがえることによって生産活動に

以上の点を踏まえて、梅棹は、「このような意味での知的生産であるならば、それは、現代に生きる人間すべての問題ではないか」(梅棹 1969, 13頁)と指摘する。なぜなら我々の社会は、すべての人間が、その日常生活において、知的生産活動を絶えず行わないではいられないような社会になりつつあるからである。この点について梅棹は、さらに詳細に、次のように述べている。

社会には、大量の情報があふれている。社会はまた、すべての人間が情報の生産者であることを期待し、それを前提として組み立てられてゆく。人びとは、情報をえて、整理し、かんがえ、結論をだし、他の個人にそれを伝達し、行動する。それは、程度の差こそあれ、みんながやらなければならないことだ。(梅棹 1969, 13頁)

梅棹によると、ここで重要となるのが、知的生産の「技術」である。つまり、今日においては、知的生産の技術は、一部の知識人のものではなく、誰にも必要なものであって、その意味では、「現代人としての実践的素養の問題」(梅棹 1969, 16頁)と言い直してもよいようなものだ、というわけである。

(2) アーカイブズ論への示唆——“ 知的生産の礎 ”としてのアーカイブズ

3(1)で確認したように、梅棹によると、現代社会においては、「既存あるいは新規の様々な情報をもとにして、それに、それぞれの人間の知的情報処理能力を作用させて、そこに新しい情報をつくりだす作業」たる知的生産活動に従事する人間が非常に多数となってきた。ここ

参加しているひとの数は、おびただしいもの」(梅棹 1969, 12頁)だからである。

で重要となるのが知的生産の「技術」だと彼は指摘するが、それと同等以上に重要となるのが知的生産の「基礎・基盤」である。

この点で示唆に富むのが、『知的生産の技術』において梅棹が言及する、「発見の手帳」をめぐる論述である。(梅棹 1969, 23-35頁) 発見の手帳とは、「毎日の経験のなかで、なにかの意味で、これはおもしろいとおもった現象を記述」(梅棹 1969, 27頁) し、「あるいは、自分の着想を記録する」(梅棹 1969, 27頁) もののことである。では、なぜこのような「発見の手帳」を活用する必要があるのであろうか。

梅棹は、「そらでものをかんがえる」(梅棹 1969, 28頁。圈点は原著者。) 手法と、「『発見の手帳』の原理」(梅棹 1969, 29頁) とを対比したうえで、次のように述べている。

紙や鉛筆をもたずに、そらでものをかんがえるのは、たのしいことである。とりとめのない空想にふけることができるから、という意味ではない。こつこつと、文字で論理をくみたててゆくよりも、そらでかんがえたほうが、直観的な透察がよくきいて、思想の脈絡がはるかにうまくつくからである。……

ところが、「発見の手帳」の原理は、そういうのとは、まったく反対である。……

数式をとりあつかうのに、暗算も筆算もそれぞれ特色があるように、思想を開発するにも、そらでやるのと字をかいてゆくのとは、おのずから特徴がちがっている。それぞれのひとの性質やくせにもよるけれど、ことの筋道の透察や、論理のくみたてについては、すくなくともわたしは、文章にかかないで、宙でかんがえるほうがうまくゆくことがおおい。しかし、材料の蓄積はそうはゆかない。

(梅棹 1969, 28-29頁。圈点は原著者。)

つまり、梅棹の考えでは、知的生産そのものに従事する際には、「そらでものをかんがえる」ほうがうまく行くことも多いが、知的生産の材料の蓄積を行う際には、「発見の手帳」のように記録を取ることが重要だ、というわけである。ここから導出できるのは、知的生産活動を行う際の基礎・基盤となる「知的生産の材料の蓄積」を実施する場合には、知的資源を適切に収集・保存・管理・利用しなければならない、という点である。

ところで、アーカイブズとは、まさに、知的資源の適切な収集・保存・管理・利用を行う機関である。したがって、アーカイブズとは“知的生産の礎”である、というアーカイブズ観を提示することは十分に可能だということができる。

以上でみてきた、梅棹『知的生産の技術』から得られるアーカイブズ論への示唆——すなわち、「“知的生産の礎”としてのアーカイブズ」というアーカイブズ観——に基づけば、「なぜアーカイブズが必要なのか」という問いに対して、次のような解答を与えることができる。すなわち、アーカイブズが必要とされる理由は、アーカイブズとは、知的資源の適切な収集・保存・管理・利用を行う“知的生産の礎”だからである、と。

4 むすびにかえて

以上のとおり本稿では、「なぜアーカイブズが必要なのか」という問いに対して、アーカイブズが必要とされる理由は、ある機関が、「組織運営の発想」に基づく対応を行う——すなわち、「組織運営」に関する「文書」を「体系的に蓄積する」ことによって、円滑かつ適切にその「組織を運営し戦略構築を行う」ための基盤を提供する——ためである、それが“知的生産の礎”だからである、という解答を導出した。最後に、これまでの論旨を踏まえた、日本社会における“難問”をひとつ投げ掛けることで、さらなる考察・検討の呼び水としたい。

日本社会における様々な組織——例えば、官公庁・民間企業・学校など——では、書記の仕事を“新人”に任せるという慣行にしばしば直面する。その背景にあるのは、おそらく、「書記の主な仕事は議事録の作成という“単純で簡単なもの”であるので、新人に任せるとにふさわしい」という発想であろう。

このような慣行と発想は、本稿の論旨に基づくと、適切であろうか。書記の仕事は、どのような意図をもって、どのような人物——例えば、新人・中堅・ベテラン——に任せるのが適切なのであろうか。その根拠は、どのように説明できるのであろうか。

参考文献

- 梅 棹 忠 夫 1969 『知的生産の技術』岩波新書
- 大 濱 徹 也 2007 『アーカイブズへの眼——記録の管理と保存の哲学——』刀水書房
- 2008 「アーカイブズの原理と哲学」(『別冊 環 図書館・アーカイブズとは何か』藤原書店)
- 土 井 崇 弘 2014 「アーカイブズの射程」(上代庸平 編『アーカイブズ学 要論』中京大学社会科学研究所)
- ベルティーニ, マリア・バルバラ 2012 湯上良 訳『アーカイブとは何か——石板からデジタル文書まで、イタリアの文書管理』法政大学出版局